

日本病理学賞とトゥーランドット

私のこれまでの「医学」と「音楽」の“二足のわらじ”の人生でのハイライトは、「医学」では「日本病理学賞」の受賞、「音楽」では、オペラ「トゥーランドット」の主演・カラフ王子と、ヨーロッパで録音したCD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集 (G. ステファノ指揮・ソフィア国立歌劇場管弦楽団)」の発行です。

「日本病理学賞」の受賞に関しては、このホームページの「記事/対談/談話」に掲載されている [2012年8月-鹿児島市医報_第51巻8号](#) の「私の歌との関わりあい — その後 —」の前半に、写真入で紹介されています。その記事の中に、2010年4月28日に東京で開催された「第99回日本病理学会総会」での私の「宿題報告講演」のことが記載されていますが、「宿題報告」とは、日本病理学会独特のシステムで、病理学の研究面で著明な業績を挙げている研究者の中から、宿題報告講演担当者が選ばれ、1年半前の日本病理学会秋季大会（私の場合は、2008年の秋の学会でした）で正式に発表され、その発表から1年半前かけて、さらに、研究を発展させて纏まった講演を行い、公演後には、その研究内容を英文総説論文として発表するよとの「宿題」が課される訳です。私の「宿題報告講演」の内容は、このホームページの「スグル先生の聴診器」に掲載されている [米澤の病理学的研究](#) で、その詳細をご覧ください。

CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集」につきましては、このホームページに別に掲載されますので、この欄では、オペラ「トゥーランドット」について述べます。このオペラ「トゥーランドット」の主演・カラフ王子を演じたことに関しましては、このホームページの「記事/対談/談話」に掲載されている [2008年8月-鹿児島市医報_第47巻8号](#) の「私の歌との関わりあい — これまで、いま、これから —」や、[鹿児島市医報「第61巻 第1号（通巻719号）2022」新春随筆_二足のわらじ人生](#)に舞台写真入りで掲載されていますし、「CD/DVDのご案内」のコーナーでその舞台写真や舞台動画の一部、また、「歌唱映像」のコーナーでも舞台動画の一部をご覧ください。舞台写真や舞台動画をご覧になってお気に入られました方は、「CD/DVDのご案内」のコーナーで紹介されておりますように、「トゥーランドット」のDVDは、「十字屋クロス」店頭（鹿児島市）または 検索「楽天市場 米澤傑」でお求めになれます。

オペラ「トゥーランドット」（ベリオ版・日本初演）の公演が開催されましたのは、2005年の11月の藤沢市民会館でしたが、総監督・畑中良輔、指揮・若杉弘、演出・栗山昌良、という当時の日本最高の布陣でした。そして、私以外の歌手は、全て、二期会のトップスターの方々に、主演のカラフ王子役は、11月20日と26日に、日本を代表するテノール歌手・福井敬さん、11月23日と27日に、私・米澤傑が歌い演じました。その「トゥーランドット」公演の2年前の2003年の秋の夜に、突然、畑中良輔先生から、私の自宅にお電話をいただき、「2年間あげるから、「トゥーランドット」のカラフ王子役の勉強をして、2005年11月の藤沢市民オペラで、カラフ王子役を歌い演じなさい。」とご下命を受けました。早速、ピアノ譜でも厚さが3cmはある「トゥーランドット」全曲の楽譜とCDを購入し、いつも、鞆には、楽譜とCDを入れておき、通勤時、電車やバスに乗っている時間などには、いつも楽譜を眺めながらCDを聴いて、とにかく歌詞とメロディを覚えるという作業に入りました。もちろん、ピアニストでもある家内にも全面協力を頼みまして、ピアノの鍵盤をたたきながら妻に歌ってもらい、まさに“口移し”でメロディを覚えてもらう、ということもしょっちゅうでした。このホームページの「道中二足のわらじ」の[ナポリ公演帰りの機内でのドクターコール（2003年12月）](#)でも取り上げられている、畑中先生からお電話を頂きまして2ヶ月後の2003年12月に、ナポリ市のサン・カルロ歌劇場で開催された「第九のナポリ公演」でテノールソリストを務めました

際にも、「第九」に関しましては、全てを暗記できていましたので（これまで、ベートーヴェン「第九」のソリストは100回を超えます）、行き帰りの飛行機の中でも、「第九」そっちのけで、「トゥーランドット」の楽譜読みと暗記をしていました。

本番の2005年の11月の4ヶ月前くらいからは、演出家のもとでの「舞台稽古」が始まり、月曜日から金曜日までは、医学部教授としての仕事を行い、土曜日の一番便を使って藤沢へ行き、1泊2日で「舞台稽古」に参加し、日曜日の最終便で鹿児島に帰り、また、教授職の仕事を行うという“二重生活”が続きました。いま思い返しましても、まさに“ゾッと”するような4ヶ月間でした。しかし、本番で、見事に、カラフ王子役を歌い演じきり、幾度にもわたる“ブラボーの嵐”とともにカーテンコールの後、幕が降りた舞台上で、演出の栗山昌良先生から「これで、ひとりのテノールスターの誕生だな！」とおっしゃっていただきましたことを、今でも鮮明に覚えています。まさに、私がいつも申し上げております「長～い苦しみ、一瞬の喜び」の典型例でした。

(2022年2月19日記)